郡山市立富田中学校
学校だより
No.37

手をたずさえて

“富中PRIDE”～自信と誇り～

- 自ら学ぶ生徒
- 正しく行動する生徒
- 健康でたくましい生徒

平成３０年１２月１１日（火）発行
【発行責任者】郡山市立富田中学校長　熊 坂　　洋

“オランダ”という国の理解が深まりました!!

清水先生の「オランダ研修報告会」（１年）12/6

12月６日（木）６校時には、１年生において「オランダ研修報告会」が行われました。本校の清水由美先生が、郡山市グローバル人材派遣海外派遣事業の派遣団員として、今年８月にオランダを訪問し、本市の姉妹都市訪問、現地の教育機関等の視察・交流等を行ってきました。６日には、市の国際政策課の職員の方をお招きし、その報告会を実施しました。

事前に生徒にとったアンケート（オランダといえば何？）の結果発表から始まり、オランダの国の様子、産業や交通、特色などを、豊富な動画や写真をもとにした紹介がありました。首都アムステルダムでの自転車の多さや大規模なチューリップ畑と市場の様子など、クイズをまじえながら、興味・関心が持てる様々な話がありました。最後には、国際政策課職員であるオランダ人のヨースト・クラルトさんと一緒に簡単なオランダ語の挨拶の発音練習をしました。生徒達にとって、たくさんの発見や気付きのある有意義な報告会でした。２名の生徒の感想を紹介します。

■　僕は、オランダの事についてあまり知らなかったのですが、今日の話を聞いて、オランダについてたくさんの事がわかりました。農産物の生産量の多さ、１８０もの多種民族、ミッフィーなどの有名なキャラクターの発祥の地であることなど、いろいろな事で驚かされました。そして、オランダ語での簡単なあいさつも教えてもらいましたが、「Ｇ」の発音がとても難しかったです。今回の報告会で、オランダについていろいろな事がわかりました。今度、もっとオランダの事を詳しく調べてみたいです。（藤田源一朗 1-2）

■　オランダについて改めて知ることができました。郡山と姉妹都市ということから、たくさんのことが分かりました。心に残ったのは、英語が話せるということで、オランダが世界２位だったことです。また、「環境が言葉を育てる」という言葉にとても共感しました。私も英語を今よりたくさん勉強して、海外に行ってみたいと思いました。（橋本華奈 1-8）

清水先生が市に提出した報告書の内容をそのまま掲載しました。よくまとめられた報告書です。

出会いが人を創る　人と人の間で言葉が育つ

(1)　はじめに

「ランドセル」や「ズック」は、オランダ語由来の言葉だという。諸説あるが、南蛮貿易から始まり、出島での交流を経た結果かもしれない。これらは、人が行き来し、言葉も行き来した結果だと思う。お互いの顔が浮かぶ交流を続け、よい影響を分かち合い、親しみを感じ、もっと深く相手を理解したい、こんな思いが互いの文化や言葉を育ててきたのだと思う。今回のグローバル人材育成海外派遣事業もこのような目的だと理解している。改めて、この機会をいただいたことに感謝したい。

(2)　オランダにおける英語教育

本屋やホテルの従業員、タクシーの運転手、ブルメン市役所で働く方々、同行してくださったオランダ出身のヨーストさんのお母さんなど、オランダで様々な方と話をした。どの方も自然に、不自由なく英語を使っていた。ヨーストさんのお母さんやライデン大学の学生に、どうやって英語を身につけたの

か質問すると、「学校で。あとは日常的にテレビなどで自然と英語を耳に、目にするから。」とのことで、日常に英語が違和感なく取り込まれている環境が大きいと感じた。

(3)　ドイツにおける英語教育について

　エッセン市内基礎学校はスマート黒板が各教室に配置され、設備も教育カリキュラムも最先端のものと感じた。興味深かったのは、理科などの教科を英語で行うというもので、事前に母語、第一言語であるドイツ語で学習した内容を英語で再度復習するものである。新出事項を外国語で行うより理解しやすいと感じた。「英語を学ぶ」というよりは「英語で学ぶ」ように計画されていた。

(4)　グローバル・マインドの育成

①　在デュッセルドルフ日本国総領事館で

　総領事と副総領事の方にお話をうかがった。「ことばができる、できない、よりも若い時から外国の方と触れ合うこと。また、自分のことばで表現できることが大切。グローバルであることと地元を大切にすることは矛盾していない。そうした外に向けられた経験と地元を大切にする気持ちを共存させることを矛盾と捉えることはナンセンスで、日本にいて学べないこともあるし、地元でできるグローバル化もある。」とのことだった。そのお話に、昔、「グローカル」という言葉を聞いたことを思い出した。「global＋local」の造語で「Think globally, act locally. Think locally, act globally.（地球規模で考え、地域、足元から行動せよ。)」を短く伝える言葉だ。この視点は常に心に留めておきたい。

②　在オランダ大使館で

　参事官の方にお話をうかがった。「まず開発教育が必要。富んでいる国、貧しい国、戦争の歴史、NGOレベルから政府レベルまでの交流（外交）を知ること。自国の歴史を知ること。国際的素養、倫理観を身につけること。日本だけで生きているのではない。どんな小さな国でも、つながりや歴史があることを知るべき。接点を持とうとする、相手の境遇に関心を持つことが立派な国際人になるためには必要。」とのことだった。これに迫るためには、英語科だけでなく、道徳や総合、学活でのキャリア教育など横断的なアプローチが必須だ。

(5)海外で働く日本人

　ドイツの在デュッセルドルフ日本国総領事館のお二方、在オランダ大使館で働くお二方、アムステルダム日本人学校で働く方に、「海外でお仕事をされるような国際的な視野を持つきっかけ」をうかがった。どの方も、多感な時期に海外にホームステイをしたり、家庭で海外の方をホームステイをさせた経験があるということが私の興味をひいた。ある方は、高校生のとき、ドイツで１週間ホームステイをし、何を話したのか全く覚えていないが、そのときに外国で働きたいと思ったそうだ。その後、英語やドイツ語を習得し、現在はドイツで働いている。出会いや経験がその後の人生を創っていると改めて感じた。

(6)言葉の習得

　英語教員という言葉を扱う者の一人として伝えたいことは、言葉は人と人との間に生まれるもの、ということである。滞在中、高速道路の休憩時に、ドライバーからいただいたラムネがおいしくて、オランダ語で「おいしい」と何というのか、教えていただいた。「Lekkar! レッカー」それからこの言葉を何度も使うことになった。滞在中に一番使ったオランダ語は、「Dank u wel.（ダンキューウェル）どうもありがとう」だ。私がこう話すと、誰もが必ず同じフレーズを返すのだが、最初は全く音がつかめなかった。しかし数日すると「Alstublieft（アシュリーフ）どういたしまして」と聞き取れるようになった。帰国してから検索し、文字と音が初めて合わさって、ストンと私の記憶に落ち着いた。自分が生活経験の中でつかんだ言葉だから、これらの言葉は忘れることはないだろう。

(7)これから

　英語は全くの外国語という日本の教室で、この状況を作っていけるよう工夫していきたい。英語が背景になるように、「英語を学ぶ→英語で学ぶ」ようにシフトしていく必要がある。誰にでも、どんな言葉にも心を開ける人でありたい。そして、自分の経験を生徒に還元していきたい。

　「グローバル化」という言葉をよく耳にします。語学を習得することは、もちろん大切なことですが、日本だけで生きているのではなく、接点を持とうとすること、相手の境遇に関心を持つことが必要である、という在オランダ大使館参事官の言葉が印象的でした。そして、出会いや経験がその後の人生を創っていく、そして言葉は人と人の間に生まれるもの、という清水先生の言葉は、これからの生徒のみんなのキャリアにとって、とても重要な示唆を与えてくれる言葉だと感じました。